

「慰安婦問題謝罪は安倍政権に致命傷」

# 慰安婦問題謝罪は安倍政権に致命傷



評論家 西尾 幹二

保守の感情を抑えにかかれればかえって火がつく。国家主義者の仮面を被った人であったからこそ、この10年高まってきた日本のナショナリズムの感情を押し殺せた。安倍氏が総理の座についてからまぎれ

期待が裏切られても「7月参院選が過ぎれば本格政権になる」「今は臥薪嘗胆だ」とい

内はだましても、中国サイドはしっかり見ていて安倍くみしやすくと判断し、米議会利用のホンダ決議案へとつながった。安倍氏の誤算である。

ない用語を用い、「米議会で決議がなされても謝罪はしない」などと強がったかと思

と相手にされなかった。今までの私の考え方からすればあり得ない話と思われたからだが、私は本気だった。

もなく歴史教科書(慰安婦、南京)、靖国、拉致の問題で集中した熱い感情は足踏みし、そらされている。安倍氏の登場が保守つぎしの巧妙な目くらましとなっているからである。

「保守の星」安倍氏の誤算 米中握手の時代に入り、資本の論理が優先し、何者かが背後で日本の政治を操っているのではないか。

首相になる前の靖国4月参拜も、なつてからの河野談話の踏襲も、米中両国の顔色を見た計画的行動で、うかつでも失言でもない。しかるに保守言論界から明確な批判の声は上がらなかった。「保守の星」安倍氏であるがゆえに、

## 論 正

るのに「次の人がいない」「官邸のスタッフが無能なせいで」とかわい坊やを守るようにひたすら庇うのも、ブレインと称する保守言論界が政権べったりで、言論人として精神が独立していないからである。

国難ですらある。最初に首相のなすべきは「日本軍が20万人の女性に性奴隷を強要した事実はない」と明確に、後からつけ入れられる余地のない言葉で宣言し、河野衆議院議長更迭へ動き出すことであった。

そしてついに訪米前の4月21日に米誌「ニューズウィーク」のインタビューに答え、首相は河野談話よりむしろはっきり軍の関与を含め日本に強制した責任があった、と後戻りできない謝罪発言まで公言した。

考えてもみてほしい。首相の開口一番の河野談話踏襲は得意の計画発言だったが、国内はだましても、中国サイドはしっかり見ていて安倍くみしやすくと判断し、米議会利用のホンダ決議案へとつながった。安倍氏の誤算である。

「狭義の強制と広義の強制の区別」というような、再び国内向けにしか通じ

通じない事なかれ主義」とい

## 保守の本当の声結集する政権を待つ

は何とかなるという日本的な事なかれ主義はもう国際社会で通らないことをこの「保守の星」が知らなかったというのだろうか。総理公認であるからには、今後、元慰安婦の賠償訴訟、過去のレイプ・センターの犯人訴追を求める狂気じみた国連のマクドゥーガル報告(1998年8月採択)に対しても反論できなくなっただけでなく、首相退陣後にもとてつもない災難がこの国に降りかかるであろう。米中は核と拉致で手のひらを返した。6カ国協議は北朝鮮の勝利である。米中もまんざらではない。彼らの次の狙いは日本の永久非核化である。米中への一層の隷属である。経済、司法、教育の米国化は着々と進み、小泉政権以来、加速されている。安倍内閣は皇室を危うくした小泉内閣の直系である。自民党は真の保守政党ではない。私は安倍政権で憲法改正をやってほしい。不安だからである。保守の本当の声を結集できる胆力を持った首相の出現を待つ。

(こ)お かんじ